

# 主日礼拝説教

2017.3.5

## 『自分を救わないキリスト』

受難節（レント）第1回

マタイの福音書 4章1～11節

和泉聖書教会

牧師 五十嵐 賢志

## 新約聖書 マタイの福音書 4章1～11節

さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。すると、試みる者が近づいて来て言った。

「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」

イエスは答えて言われた。

「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある。」

すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、言った。

「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる』と書いてありますから。」

イエスは言われた。

「『あなたの神である主を試みてはならない』とも書いてある。」

今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。

「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」

イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ』と書いてある。」

すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。

## 梗概

### 序

- I. イエスは何を拒否されたのか
- II. サタンに対して答えているのか
- III. 発想が同じ

### 結

## 序

聖書の中には、象徴的な数字がしばしば見られます。「七」と言う数字は、神が天と地を六日で造られ七日目に休まれたというところから、巡っている時間の節目としての意味を持っています。「三」や「十」あるいは「十二」「五十」などが意味の伴う数字としてありますが、きょう特に注目しておきたいのは「四十」という数字です。

この数が聖書の中で最初に見られるのは、ノアの洪水の物語の中です。「四十日四十夜」降り続いた雨によって地を覆う大洪水がもたらされました。モーセによってエジプトから連れ出された人たちが、神に不平を言ったため荒野を彷徨うことになった期間も「四十年」でした。また、モーセが神から十戒を授かるために山にいた期間も「四十日四十夜」でした。この間、モーセは「パンも食べず、水も飲まなかった」(出エジプト 34:28)と言います。エリヤがバアルの預言者ら四百人と対決した後、疲れ果てて死を願ったとき、御使いの用意したパンを食べて力を得て「四十日四十夜」歩いてホレブの

山に行ったということもありました。

このように見ると、この「四十」という数に象徴されているのは、「苦しみ」であり「忍耐」であると言えるでしょう。苦しみに耐えつつ、それでも立ち上がって歩み出す期間と言えます。

古来、教会では、この「四十」という数字を鑑みてキリストの十字架からさかのぼる主日を除いた四十日間をレント（受難節）として覚えました。

伝統的な教会の暦においてレントの最初の主日に決まって朗読されてきたのが、「四十日四十夜」の断食の後、イエスが悪魔の試みをお受けになったこの箇所です。

## 1. イエスは何を拒否されたのか

水を飲まずに生きられるのは三日、ものを食べずに生きられるのは三十日と言われます。主イエスは「四十日四十夜」の断食をなさいました。あえて、死と隣り合わせの状況をつくって悪魔の試みをお受けになったのだということです。

なぜ、主イエスは悪魔の試みを受けなければならなかったのでしょうか。その理由については、明確に語ることを聖書は避けております。これに関連してもう一つのことを予め述べておく必要があります。この悪魔の試みは、目撃者のいない状況で起こったということです。主イエスとサタンしかここで何が起きたのか知り得ないということです。なのに、福音書に記録されているということは、主イエス自らこの出来事を弟子たちに語って聞かせたのだということになります。語られたのにはそれなりの意味があるはずです。福音書に書かれた事からを読む度に、主はなぜサタンの試みを受けられたのか、と問い

つつ私たちが思いを巡らせることに意味があるということに他なりません。

そのような問を胸に秘めつつ書かれていることをなぞっていくのですが、最初の誘惑は「石にパンになれ」というものでした。四十日四十夜の断食の後ですから、これ以上食べなければ死んでしまうというぎりぎりのところにありました。奇蹟であれ何であれ、それによって食糧が得られるのであればそれで良いのではないのでしょうか。

そもそもこのような悪魔の誘惑は、私たちにとっては誘惑になり得ません。なぜなら、石をパンに変えるような力が端から私たちにはないからです。むしろ、おいしそうなごちそうを差し出しておいて

「何でも私の言うことを聞いたら食べさせてあげよう」

というほうが確実でしょう。

石をパンに変えることのできるお方だからこそ、このサタンの提案を受け入れることが誘惑になり得たのです。

イエスは、

「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの**ことば**による』と書いてある」

と言われました。その通り、申命記8章2節以下にこう書いてあります。

「あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。それで主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナを食べさせられた。それは、人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる、ということ、あなたにわからせるためであった。この四十年の間、あなたの着物はすり切れ

ず、あなたの足は、はれなかった。」

(申命記 8:2~4)

「主の口から出るすべてのもの」とは、それを代表しているのは天からのパン「マナ」でした。彼らはそれを食べることによって四十年の間養われたのです。神のことばが実際のマナという食物を生み出したわけです。とすると、「石にパンになれ」というのと、本質的に違いがないということになります。なぜなら、イエスが命じればそれはみことばの奇跡となるからです。

なぜ「石にパンになれ」と命じて食物を得てはならないのでしょうか。イエスが奇跡を起こさなくとも、神に祈って食物を与えていただくというのならどうでしょう。イエスは、パンを取って感謝してそれを裂き、男だけで五千人もの人たちに十分な食糧を分け与えられたではありませんか。

つまり、ご自分のために神の力を用いることを、この方は断固拒否されたのです。

## II. サタンに対して答えているのか

サタンは、今度は聖書のことばを引き合いに出してイエスを誘惑いたします。高い建物の頂に立たせ、「飛び降りてみよ」と言うのです。「足が石に打ち当たることがない」というのは、詩篇91篇からのことばで、そこに描かれているのは、「神に信頼する者を神は守られる」というモチーフです。こうあります。

「まことに主は、あなたのために、御使いたちに命じて、すべての道で、あなたを守るようにされる。彼らは、その手で、あなたをささえ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにする。」

(詩篇 91:11~12)

さらにこうあります。

「彼がわたしを愛しているから、わたしは彼を助け出そう。彼がわたしの名を知っているから、わたしは彼を高く上げよう。彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう。わたしは、彼を長いのちで満ち足らせ、わたしの救いを彼に見せよう。」

(同 14~16節)

「彼がわたしを愛しているから」とは、イエスに置き換えて言えば、イエスが父である神を愛しているということになります。つまり、サタンがイエスに問うているのは、神の愛が本当なのかどうか、或いはイエスの神への愛が真実なのかどうか「試してみよ」ということです。

このサタンの思惑の背後にあったのは、

「神はお前を十字架で見殺しにするためにここに使わしたのではなかったか! それが神のお前への愛なのか?」

ということです。

このやりとりで明らかになるのは、神は御子を救うつもりはないし、イエスも父に命を救ってくれと求める気もないということです。

「石にパンになれ」「飛び降りてみよ」というこのサタンの誘惑にお答えになったイエスのことばは、このように見ていくと、答えているようで答えになっていないと言えるのです。なぜなら、神のことばによるマナによって民は生かされたわけだし、愛と信頼があれば命が救ってもらえるではないかというサタンの挑戦に対し「神である主を試みてはならない」という答えもまた、直接的な答えになっていないからです。

このところで見えるのは、イエスはサタンの試みに勝利したのではない、サタンのことばに身をかわ躲しただけです。そして、それによって

見えてくるのは、イエスがご自分のために神の力、神の御子としての権威を用いようとはなさらなかったということです。

### Ⅲ. 発想が同じ

さて、視点を変えて見たいと思います。

「あなたが神の子なら…」

と悪魔はイエスに問いかけました。この言い方をしたサタンの意図とは何でしょう。「神の子であるかどうか知りたいので…」というのではありません。半信半疑なのではない。むしろ確信を持ってイエスが神の子であるゆえに試みているのです。

サタンが言っているのは、

「あなたは神の子なのだから、これくらいのことわけなくできるでしょう?」

ということです。その場合の「神の子」とは、どういう前提なのでしょう。

近頃「神ってる」ということばが頻繁に聞かれるようになりました。昨年優勝したプロ野球のある球団の選手が二試合連続でサヨナラホームランを放ったことを監督が賞賛していったことから広まったそうです。或いは、ある格闘技の選手が自分に「神の子」という称号をつけていました。天才的な格闘センスをそのように表現したということです。こういう言い方は枚挙に暇がありません。以前は「〇〇のカリスマ」という言い方が流行りましたが、これもその類いです。

人間は、いわゆる「神業」<sup>かみわざ</sup>なるものを神という存在に対して潜在的に期待しているのです。「石にパンになれ」と命じることがまさにそうです。高いところから飛び降りても地面に打ちつけられることも



ない、こういう神業を期待するのです。

「あなたが神の子なら…」

という問いかけは、サタンのイエスに対するものであると共に、私たち人間の神への潜在的な欲求と共通しているのではないのでしょうか。空腹になればパンを求め、渴けば水をくれと叫ぶ。肉が食いたいと言ってそれを要求した。神はこれらに対して奇蹟によって応じてきました。モーセによってエジプトから助け出された民はこういうことを経験してきたのです。神であるということは神がかり的な力を持っていることだというのは、ある意味そうであるかもしれませんが。しかし、そのような潜在的な人間の期待がサタンの誘惑のことばと同じであるということに恐ろしさを感じないのでしょうか。サタンと我々の発想が同じなのです。

「神がおられるならば、どうしてあのような大きな地震と津波で多くの人たちが死ななければならなかったのか？」

「神がおられるならば、どうして戦争はなくなるのか？」

「神がおられるならば、どうして悪い者たちを野放しにしているのか？」

こういう問も、根っこは同じでしょう。

「あなたが神の子なら、世界のこのような問題はわけもなく解決できるでしょう？」

しかし、こういうものの見方がサタンと同じであるのです。そして、私たちの「神の子」に対するそういうイメージを修正しなければなりません。

悪魔のこれらのイエスに対する揺さぶりはどういう意図であったのでしょうか。それは、

「自分を救え。いのちを粗末にするな」

ということです。

サタンは、イエスが十字架で死ぬために世に来たということを知っていました。十字架を阻止することが悪魔の最大の目的です。キリストがすべての人の罪の身代わりに罰せられることで、その罪から救い、悪魔の手から彼らを取り戻そうとしていたのを、サタンも知っていたのです。だから、先回りして交渉を持ちかけました。

「全部をあなたに差し上げましょう。もし、ひれ伏して私を拝むのなら」

ここにサタンの本音が見えてきました。「神ならこれくらいできるでしょう？ 神がいるならなぜ世界はこのようなのか？ 神などいない。だったら私を拝め」

このようにして神を否定して、自らを神とする。これがサタンのやり口であり、人間はみなその筋書き通りに自らが神になろうと躍起になっているではありませんか。人間が神のようになろうとするのは、太古の昔のアダムとエバが罪を犯したときから、今に至るまでまったく変わっていません。

「自分さえも救えない神の子などいらぬ」

と、悪魔は人間に思わせたいのです。そして御子に対しては十字架に就くことを思いとどまらせたかったのです。

## 結

イエスは「神の子」なのだから、十字架にまっすぐ顔を向けて歩まれたのです。

イエスは「神の子」なのだから、十字架で愛する子を殺そうとする父なる神の意志をまっすぐに受けとめたのです。

イエスは「神の子」なのだから、十字架で身代わりとなって死ぬ

ために、自らのいのちを惜しむことをなさらなかったのです。

十字架にこそ「神の子」のイメージがあるのです。

「四十日四十夜」の断食の後、さらに増し加わる苦難への道をイエスは進んで行かれました。しかし、この苦しみゆえに救いがもたらされ、十字架があるから復活あるのです。キリストのからだである私たちもまた、同じ「神の子」のイメージに生きる者です。共に苦難から栄光への道を歩ませていただきましょう。